
憑き物落とし

独楽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

憑き物落し

【Nコード】

N5912J

【作者名】

独楽

【あらすじ】

九州のとある霊地に住まう霊媒師、三舟驟雨^{みふね・しゅう}。

彼とその無二の友人である片瀬真一とが出逢う怪異の数々。ホラーなのにごどこかほっこりするような、そんなお話です。

伽藍の檻

「九十九落し」

—

他愛もない話し声は何よりも心地好く聴こえるものだ

永遠に聞き続けることが叶わないと理解しているからこそなのかも
しれない

濡れ縁に座して娘の淹れてくれたお茶を静かに口にはこぼ

皺だらけになつた唇が微かに湿つた

もう幾許もない自身の命をどう過ごそうか

最近はそのばかりを考えている

生に執着しているわけでもないのだが

最近はやけに娘が孫を連れて遊びにやってくる

とても嬉しく幸せな一時を過ごしている

これ以上になにを望むべくもなく

そして、

これ以上になにがしたいわけでもない

私の一生は今燃え尽きようとしているのだから

色々な経験をした

様々な人と触れ合った

幸福だった

孫娘が庭で拾った石を私に持ってきた

『くれるのかい』

『うん』

それはとても不思議な色をした石だった

陽の光を浴びたその石は薄い緑色に輝いている

よくこんなに綺麗な石を見つけたものだど、孫娘の頭を優しく撫でた

そう云えば、

もう何十年も昔の事だ

こんな色に輝く石を私にくれた女性がいた

名はたしか、

『長谷川・・・千鶴子さんでよろしいですか』

彼女は自分の名を呼ばれると、軽く頭を下げた

今までそれなりに沢山の依頼人に会ってきたが

ここまで端正な顔立ちの女性に逢った事はなかった

白粉を全身に塗りたくっているのではないかと錯覚してしまいそんなほどに白い肌

しかし、唇だけはやけに紅い

彼女が派手に化粧を施しているようには見えない

元々が良いのだ、下手に化粧をしては逆効果なのだろう

『片瀬からあなたが今日お見えになる事は如何っていますが、どのようなご依頼で』

私がそう訊くと、彼女はもう一度頭を下げて口を開いた

『実は、主人の事でご相談が』

私の友人でたまに仕事の幹旋を頼んでいる片瀬真一が、どこで知り合いになったのか

長谷川千鶴子の事を私に依頼してきたのは先週末に私の家で酒を酌み交わしている時であった

実を云えば、この千鶴子と云う女性の悩み事は片瀬からすでに聞かされていたが

私は敢えて彼女に訊いた

『ご主人が、どうかされましたか』

『はい、主人の長谷川 要は物書きをしております』

『ほう、ご主人は小説家ですか』

これもすでに知っている事である、だが私は知らぬ振りをした

『ええ、ですので仕事柄様々な町に出向いては家を留守にする事が殆どでした』

千鶴子は控えめに私の顔を見上げ、さらに話を続けた

『主人に異変が起きたのは去年の暮れの事でした』

千鶴子の夫で長谷川 要は作家である

仕事で諸所を旅歩く事が多い

昨年の暮れ、今から三ヶ月程前になるが

長谷川がとある廃寺を取材して家に帰ってきた

だが、帰宅した長谷川の様子がどうもいつもと違う

食事を一切摂らなくなったのである

かと思いきや、真夜中に突然起き出して飼っている鶏を毛も筆らずに生で喰ったり

朝は一切声を出さず、夜になると突然喚き声を上げる

そんな奇怪な行動をここ数ヶ月毎晩のように繰り返しているというのだ

そんな長谷川の邸宅には三人の使用人がいたが

皆、不気味がって暇を取っている

どうにもこうにも参ってしまった千鶴子はたまたま知り合った片瀬に、私の事を聞き

今に至る、と云うわけである

『どこか精神を患ってしまったのか、とても私どもでは分かりきれませんもので』

『医者には、お診せになられましたか』

『ええ。 ですが、どなたに診せても精神に異常をきたしている
しか』

医者が匙を投げるのも無理はない

『ご主人は、日頃から諸所の神社やお寺に行かれておりましたか』

千鶴子はしばらく考えてから

『いいえ、仕事で極稀に尋ねる事はあつたと思いますが』

『そうですか』

三

『で、どうだったんだ』

『何がだ・・・』

片瀬真一は口元まで運びかけた杯を盆の上に戻すと

隣で飄々と美酒に舌鼓している友人、三舟驟雨を凝つと見据えた

『千鶴子さんの依頼の件だよ』

『ああ、その事か』

『その事とはなんだ、人がせつかく仕事を持って来てやったというに』

『おいおい、真一よ』

『なんだ・・・』

『お前が俺の食い扶持を心配しているのか、それとも真意は別の』

そこまで云うと、驟雨は少し間を擱いてから

『そうだな、下の心にあるのか』

驟雨の酒に濡れた唇が微かに吊り上る

真一はようやく酒を口に含んだところだったが、含んだ分をすべて庭先にぶちまけた

『ば、ばか・・・。 驟雨、俺はなあ』

『ははは、冗談だよ。 もちろん依頼を受けたさ』

驟雨がそう云うと、真一はぱっと表情を一変させて喜んだ

『だが、長谷川要に憑依している憑き物が、果たして俺の手に負える喪のかどうか』

『お、おいおい・・・。 冗談だろ驟雨、お前の手に負えない喪なんて』

驟雨は肴にしているイカの塩辛を一口食べ、それからゆっくりと口を開いた

『いいか、真一。俺にだって出来ない事は沢山あるんだ。人は出来る事と出来ぬ事を考えた時に、対等になる』

片瀬真一は顎の無精髭を右手で掻きながら渋い顔をした

『む、ん、つまりどう云う事だ？』

『つまりはそう云う事だよ』

真一は益々渋面を強めて、杯に残っている酒を飲み干した

『なあ驟雨、俺は頭が良い方ではないんだ、出来るならもっと理解し易い説明を願うよ』

驟雨は ははつと軽く微笑むと、また一口イカの塩辛を口に運んだ

『つまりだ、人がこの世で出来ぬと思っていることと出来るかもしれぬと知っていることの数は、同じだと云う事だ』

真一はここで初めて納得したような顔をした

『なるほどな。では、今回の依頼は出来るのではないか。そう判断した結果なのか？』

『そうなるな』

『しかし、そんな曖昧な自信で本当に大丈夫なのかあ』

『まあ、実際に長谷川要と会って診ない事には正確なことは云えん
わ』

『それもそうだな。 仮にお前が手に負えなかつたらきつとこの世
の何人の手にも負えぬという事だからな』

『それは違つと云つに……。 お前はつくづく面白い男だな』

今夜は望月だった

濡れ縁に座し、明かりは点けずともそれなり風情ある明るさになる

初冬と云つても昼にはそれなりの残暑が残る

だが、その暑さも夜には消え去り冬の風を庭一面に呼び込む

熱爛が段々と美味くなる時季であるから

驟雨の家で真一が呑みに来る階数も普段より増えるというもの

だが、二人にとってはこのヒトトキが何よりも心安らぎ 愉しいと
思える時間

そんな時間が増えるのはお互いにとって益のあることは間違いないな
った

霊峰である飯盛山の麓、竹林の間に長い小道が続いている

その先にある木造の平屋が、長谷川邸

今では妻の長谷川千鶴子と夫の要以外は誰も居らず、物静かな佇まいを醸し出している

二人で住むには余りにも広い家である

長谷川邸へと続く小道を歩きながら、片瀬は驟雨に小声で話しかけた

『なあ、驟雨……。小説家とはあんなに儲かる職業なのかな』

先頭を歩く千鶴子には聴こえないぎりぎりの声音で話しかけた片瀬

三人の真ん中を歩く驟雨は少し首を後ろに向けて『人それぞれだろ、と微笑を含んで応えた

驟雨は白地の色無地を少しだらりと着こなしている

それに比べて片瀬はしっかりとネクタイを締め、昨日新調したばかりの上着を着込む洒落を凝らしていた

『それにしてもその格好で寒くないのか』

昼間のこの時間でも、さすがに風は真冬の到来を肌で感じる程に寒くなっていた

木々の紅葉はとっくに終わりを迎え あちらこちらに山茶花や椿の

花が目立つようになっていた

驟雨の姿は春先か初夏の時季に着用する着物である

大柄な片瀬は、見た目に反して低血圧な為 冬場は特に厚着をしている

『そりゃあ少しは寒さも感じるが、それはそれとして対処はしているよ』

曖昧な驟雨の言葉に納得できずにいる片瀬だったが、先頭を歩く千鶴子が二人に向き直り

『こちらでございます』 と声を掛けたものだから、片瀬真一は一瞬にして顔を強張らせた

もはや驟雨の着物の趣味をとやかく言う余裕はなくなっていた

目の前には立派な門構えの長谷川邸があり、石畳の上をしばらく歩くと、玄関が見えてきた

三人が玄関の前まで案内されてくると、右手の方になにやら古い土蔵があるのが窺えた

驟雨はしばし立ち止まって、土蔵を見据えた

『どうかなさいましたか、驟雨様』

千鶴子が怪訝そうな顔で驟雨を見る

『いえ、ただ古い蔵がありますが、中にはなにが』

『ああ、もうずいぶんと古くからあるお蔵でして、主人がよく書物の保管に適しているからと』

『では、あの中には書物だけ……保管されていると』

『ええ、おそらくは。鍵も主人しか持っておりませんので詳しくは存じませんが』

『そうですか』

それ以上驟雨は何も訊かず、千鶴子は二人を家の中に招き入れた

驟雨と片瀬は二十畳近くある応接間に通された

しばらくすると盆に茶の入った湯のみを二つ載せた千鶴子が戻ってきた

冷えた体が、お茶の湯気で温められる

片瀬は早速一口お茶を啜ろうとしたが、なぜか驟雨の左手がそれを制した

おそらく高価な輸入物であろうソファーに並んで腰を下ろしている二人

『な、なんだ驟雨』

片瀬の問いには応えず、驟雨は千鶴子に紙と筆がないかと訊ねた

少々お待ちを、と云って千鶴子が部屋を出た

数分の後に紙と筆ペンを持って千鶴子が入ってきた

『ごめんなさい、習字用の筆がどこにあるのか分からなくて、筆ペンでも宜しかったでしょうか』

『ええ、構いませんよ。ありがとうございます』

そう云った驟雨は紙に何やら記号のような文字のようなものを書き記し、それを片瀬に渡した

『これを持っている』

しばらくはここ最近の長谷川要についての事を訊いてみたが、得られるものは乏しかった

このまま話をしていては時間の無駄だと判断し、驟雨は要の寝ている寝室へ向かう事にした

応接間とは魔逆に位置する寝室までは廊下を幾分か歩いた

千鶴子が寝室の襖を開けると、ただっ広い畳の部屋にぱつりと長谷川要が眠っている

驟雨と真一は要の枕元に座した

『ここ二日間、昼間はずっと眠ってばかりいるんです』

千鶴子が不安そうな顔で驟雨に云った

驟雨は右手を要の鳩尾あたりに翳し、なにやら呪文のようなものを唱えた

それが四半刻も続いた

漸く驟雨の口が閉じ、そして驟雨は千鶴子に向き直った

『ご主人には間違いなく憑き物が憑いております』

『ど、どんな憑き物なんだ？』

片瀬が一步膝を進めて驟雨に訊いた

千鶴子も固唾を呑んでいる

『……伽藍神。いや、こうなっては伽藍神とは呼べぬかも
しませんが、ともかく神の祟りにあっておりますのは確かですね』

『か、神……さま？』

千鶴子と片瀬は一樣にして目を点にしている

『お、おい驟雨……その、がらん……神というのは何なのだ
？』

『ん。そつだな……。解り易く云うならば、寺院を守護
する神だ』

他にも、護伽藍神や守護伽藍などと呼ばれる時もある。と付け足した

『……そ、それで。主人は助かるのでしょうか?』

千鶴子の言葉に、驟雨はしばしの含みをもって答えた

『それは、まだなんとも。只の怨霊や悪鬼の類でしたら無理に引き剥がす事も出来ましようが、ご主人に憑いているものは神です。本来ならば人間を守護するものがなぜご主人に憑いて怪異を起こしているのか、その原因が解らなければ伽藍神を落す事は難しいでしょう』

『では、主人はずっとこのまま……』

千鶴子はがっくりと頂垂れた

『おい驟雨、なんとかならないものなのか』

片瀬は真っ直ぐに三舟驟雨を見て云った

『一つだけ、希はある』

『本当か?』

『どうすれば、宜しいのでしょうか?』

千鶴子もつい声を高める

『それには先ず、あの離れにある土蔵の中を拝見せねばなりません』

ん
『

先に蔵の前で待っていた驟雨と片瀬に後ろから千鶴子が声をかけた

『鍵がありました』

どうぞ、と千鶴子が驟雨に鍵を渡す

鍵を開け、最初に驟雨が蔵へ入り その次に片瀬、千鶴子と続いて入った

昼間だと云うのに土蔵の中は暗い

最初に声を出したのは片瀬だった

『お・・・おい、驟雨これは』

その言葉に呼応するように驟雨もまた千鶴子へ言葉を掛けた

『ご主人は、この数多ある仏像をどこで?』

しかし、千鶴子は言葉をなくし呆然とその場に立ち尽くすままだ

蔵の中には無数の仏像や、神具などが保管されていたのだ

蔵の奥へと進んで行く

奥へと進むのも一苦労なほどに物が溢れかえっている

『……ここまで仏像やがあると、薄気味悪さを通り越しているな』

片瀬は震える声を抑えつつ驟雨に話しかけた

『真一、あれを覚えてみる』

驟雨の指差す方向を片瀬が視る

やはり仏像が雑に、は置かれていなかった

その仏像は他のものと比べると一番劣化が進んでいるようで木も腐敗が進んでいる

『この仏像だけが他のものと明らかに違う』

驟雨のその言葉に片瀬も『ん、うむ』と訝しむような眼つきで観察する

『俺には襷褌の仏像にしか見えんが……』

驟雨は人と然程大きさの変わらぬ像の前に右膝をついてしゃがみ込んだ

左の掌で仏像の胸の辺りに触れ、右の人差し指と中指を自分の唇に軽く当てると

なにやらを短く唱えた

暫くすると、朽ちかけていた仏像ががたと震えだし、その場に浮遊した

『しゅ、驟雨……どうなってるんだ？』

片瀬は尻餅をついて浮き上がった仏像を見上げた

『心配するな、真一』

驟雨はその場にしゃがみ込んだままだ

『この仏像に取り憑いているモノを起こしたに過ぎん』

浮遊している仏像の口が小刻みに動き出したのと、片瀬が腰を抜かしたのとは殆ど同時だった

【ナンゾ用力、ソコモト】

はつきりと仏像の口が動き、喋りだした

片瀬はあまりの恐怖に意識を失って、その場に倒れている

『……アナタの名はなんと申す？』

驟雨はやはりしゃがみ込む姿勢を崩さずに、仏像に話しかけた

『名は、なんと申すのか尋ねている』

【ソコナ貴様八、霊媒師ノ類カ】

『……そのような者です』

【我が名八伽藍】

仏像はそれだけ告げると、がたんと床へ落ちた

落ちた仏像が動きを止めたと同時に、片瀬真一が意識を取り戻す

長谷川千鶴子は蔵の隅に座り込んだまま何やらがたがたと震えながら賢明に経を唱え続けている

『お二人とも、もう大丈夫ですよ？』

『しゅ、しゅうつ……いま、今は一体、なんなんだ……』

『

一先ず蔵を出た三人は母屋に戻り、事の次第を千鶴子に告げた

『驟雨様、それでこの後わたくしどもは何をすれば宜しいのですようか』

千鶴子はすっかり怯えきつた顔をしている

一方片瀬真一は、そんな千鶴子の手を握り必死に声をかけている

『真一、お主も先程まで恐怖で気絶していたと云うに、懸命な事だな』

驟雨はくつくと北叟笑む

『あ、あれはただ……ちょっとだけ俺も驚いてだな』

『結論から云いましょう』

驟雨は表情を硬くさせ、千鶴子に向き直る

『手が、つけられませぬ』

片瀬と千鶴子は目を丸くさせた

そして、片瀬は驟雨に詰め寄り、どう云う事だと訊いた

『どうも甲も無い。あれには手をつけられんのだ。長谷川殿は神の領域に土足で踏み込み、そして悪行を働いた。それも幾度となくだ』

千鶴子が声にならない声で、訊く

『……悪行と、云うのは』

暫くの間、驟雨は千鶴子を見据えてから口を開いた

『つまり、あの蔵にあった仏像や神具の全てはご主人、長谷川要殿が行く先々の寺や神社から無断に持ち出した物』

『そ、そんな……』

『……盗んだ、と云うことか』

『どつやらそのようです』

『で、では。主人は・・・もう助からずあのままだと?』

驟雨は否、と首を振った

『憑き物を落とすことは出来ませぬが、差し出すことで魂を昇華することはできます』

『魂を、昇華させる・・・?』

簡単に云えば、死を与え魂の穢れを落とす。と云うこと

『しゅ、主人を殺せと仰るのですか』

『その通りです』

神罰、と云う言葉を聞いた事はないでしょうか?

神罰。神が下す罰を人は受けねばならない

それは常に人がそこに存在し、息づく限りは逃れられません

人の罪とは大きく別けて二つ

神の許しを請える罪と、請えぬ罪

『ご主人は後者の罪でございますれば、それを覆す所業を我々はできません』

『なんて惨い……』

千鶴子は両手で顔を覆い隠し、声を殺して泣いた

その時である。長谷川要が寝かされている寝室の方から、なにやらごとりと倒れる音が聞こえたのは

『驟雨、今の音は……』

真一は早速顔を青ざめ、ソファアの影に身を潜めている

『なあに、要殿が起きられたのだろう。少しばかり我を忘れてな』

驟雨は顔に微笑を浮かべたまま、そう云った

三舟驟雨と云う男は常にこうなのである。どのように緊迫した場面であろうとその言動に表すことはない。どこか飄々として堂々と佇む

軽く着物の袖を内側へ折りこむと、驟雨は千鶴子にもソファアの影へ行くように述べ

己は客間の扉に二枚の護符をそれぞれ左右に貼り付けた後、数歩下がって呪を唱え始めた

数十秒後、廊下を奇妙な足音が這いずり回る

『お、おい……驟雨？』

呪を唱え続けながら、少しだけ驟雨は後ろで身を隠している真一に首だけ傾けてみせた

『奇妙な音が聞こえるが、まさか要殿が徘徊しておられるのか？』

だろうな。

それだけ云うと、驟雨はまた正面、扉の方へと向き直る

ぐちゃ、びしゃ・・・

ばたん、ぐしゃ・・・

ひた、ひた・・・ひた・・・ひた。

足音は驟雨達の居る客間の目の前で止まった

『くるぞ』

驟雨がそう云ったのも束の間、勢い良く扉が開け放たれると一迅の風と供に黒い影のようなものが飛び込んできた

片瀬や千鶴子の目には影すらみえていなかったかもしれない

あまりの突風に誰もが一瞬目を閉じてしまったのだ

『い、今のはなんなんだ驟雨！ なにか居るのか？』

胡坐をかき、右の人差し指と中指を唇に当てたまま、瞳を閉じ呪

を唱えている

片瀬は千鶴子を庇いながら、部屋中を見回している

部屋の中では永遠と旋風が吹き荒れ、花瓶や硝子で出来た置物などを粉碎してはそのかすを巻き上げている

それらの破片が片瀬の頬や手の甲を掠めているものだから

千鶴子を庇う片瀬真一は血まみれになっていた

『驟雨……もう、これ以上は持たん。なんとか、してくれ』

風の轟音にかき消されそうになる片瀬の声は驟雨に届いたのか

『よく絶えたな。もう終わる……』

驟雨がそう呟いた時、天井のシャンデリアが大きく揺らぎ、驟雨の頭上めがけて落下した

目を開けぬまま、それを紙一重で交わした驟雨は、シャンデリアの上に跨る黒い影に向けて自分の息を吹きかけた

すると、風は見る見る内に収まり、黒い影でしかなかった物体は徐々にその姿を人のものへと変えてゆく

長谷川要である。

その容貌はとても人とは思えぬほどに禍々しいものになってはいたが

『あなた……』

千鶴子は変わり果てた姿の夫を前にして声を失っている

長谷川要は体型は幼児と見紛うほどに小さくなり、口の両端からは先の尖った犬歯が長く伸びている

時折、驟雨達を威嚇するかのように人のものとは思えぬ長い舌を出しては引つ込めを繰り返し、涎を絶え間なく流し続けている

『禍々しい鬼と、化しております』

驟雨は要の額に二本の指を押し当てている

千鶴子は驟雨の足元にしがみ付き、泣きじゃくりながら夫の快復を求めた

『どうにか夫は、要は助かりませんか』

驟雨は足元には目をやらず、じっと長谷川要を見つめたまま答えた

『先程も云った通り、もう元の人間に戻す術はありません。あとはこの者を殺してしまうほかには』

『驟雨、ホントに手立てはないのか？ お前のことだ、なにか良い案が一つはあるんじゃないのか？』

片瀬はぼろぼろに傷ついた四肢を引きずって、驟雨たちのいる場所まで来た

『お前と云う漢は、つくづく良い奴だな』

無いことも無い。 が、少々危険すぎる

『ほれみる・・・やっぱりあるんじゃないか』

片瀬はどさつとその場に座り込んだ

『危険すぎるのだ・・・とても成功するとは思えん』

驟雨は首を横に大きく振り、足元に居る千鶴子に視線をむけた

『ど、どんな方法なのでしょうか・・・？』

千鶴子は凝つと驟雨を見上げる

『・・・・・・・・』

その時である

『な、なんだこの鳥は・・・』

片瀬が突如現れた紺碧に輝く小鳥に目を丸くした

その小鳥は驟雨の肩に羽を休めると、極々小さな泣き声をあげて、
今度は窓から飛び去った

『なんだったのだ、あの鳥は・・・』

『私の式だよ』

驟雨は少し穏やかな笑みを浮かべて片瀬をみた

『式とはなんなのだ？』

『私が使役している鬼の事さ』

片瀬はなんとも不思議そうな顔をしているが、それ以上はなにも訊かなかった

『方法があります。　が、これは貴女がやらねばならぬこと、それ故、不可能かと』

驟雨は千鶴子に冷徹に言い放った

『な、何故わたくしには出来ない』

『今夜一晩、朝日が昇る頃まで貴女にはこの部屋でこの変わり果てた禍々しい鬼と供に過ごしてもらわねばならない。　もちろん鬼には呪を施し決して動けぬようには致しますが・・・なにぶん鬼でございます。それも只の鬼ではない・・・「伽藍の鬼」。　万が一にも呪が解けてしまう事も充分に有り得る』

『ば、ばか・・・驟雨。　そんな危険なこと、千鶴子さんにさせられるかよ』

『真一、これ以外に方法はない。　それに、長谷川要がこのような悪鬼に憑かれた原因の一つは少なからず彼女にあるのだから・・・』

『

『原因は要殿が盗みを働いたからではないのか？』

『もちろん直接の原因はそうだな。しかし……』

そこまで云つて、驟雨は少し間をあけた

色情とは時に罪なもの。

驟雨が最期にそう呟いた

『ん？ なんだ……？』

片瀬には驟雨が云つた言葉の意味がよく理解し切れていない。だが、この言葉の意味を理解してしまった人物は、突然がたがたと震えだした

『千鶴子……さん』

片瀬の言葉は千鶴子の耳には届かない。ただ震える身体を懸命に両腕で押さえ込んでいる

『色情、色欲、欲情。これらは人を統べる心情の一つではあるが、あまりに強くそれを望めば、時に他人を傷つけ、貶める結果を齎す』

『貴女には選ぶ権利がある』

唯一の夫である長谷川要を助け、己の罪を悔い改めるか

このまま下賤の道を歩み続けるのかを……。

終章

こくこくと、喉を潤す酒を美味そうに呑む

『お前は本当に、美味そうに酒を呑むな』

驟雨は片瀬真一の顔を肴に酒を呑む

『お前はいつも飄々としているからな、酒を美味いとか不味いとか感じているのか？』

片瀬の精一杯の皮肉も、驟雨にはまったく通じてはいない

『月があんなに明るいと、不思議と酒も美味いさ』

三舟驟雨の邸宅。その縁側で二人は酒を呑んでいる

この家には二人以外誰もいない

こくこくと、片瀬は酒を呑む

月が出ていた。光が庭を照らし、かこうがん花崗岩で出来た御影石みかげいしがぴかぴかと光を反射している

庭には無駄な草木などはなく、綺麗に磨かれた庭石が並び、こじんまりとした池があるのみ。

時折その池から鯉が餌を求めて顔を出す程度で、とても静かな時間^間がここには流れていた

それにしても、と驟雨が云った

『お前の顔を見ていると、酒も進む。それに、この塩辛も実に旨い』

片瀬は照れくさそうに笑いながら、自分が土産に持ってきた塩辛の説明をした

『旨いだろ？ これは酒盗と云ってな、鯉の内臓で作られた塩からだぞ。土佐の親戚から送られてきた物なんだが、俺が食べてみて旨かったから今日土産に持ってきてやったんだ』

『ふむ、酒盗か。たしかに、これを肴さかなにしておると酒がいくらあっても足りんな』

二人は声を出して笑いあった

驟雨が酒を呑み、片瀬も酒を呑む。二人の関係はまさに酒の席

で築かれたものなのかもしれない

その事を二人は自覚してかしらさずか、お互いを理解し合っている

『鰹の内臓で出来ているんだが、こつちではなかなか手に入らんからな・・・ん？ もう酒が切れてしまったな』

片瀬がどうしたものかと驟雨を見ると、驟雨も少し残念そうな顔をした

『俺が買つてこようか・・・？』

片瀬は酒の買出しを、驟雨にやらせるのは忍びないと思ったのか、そう云った

だが、驟雨はうつすらと笑みを零すと、片瀬に『いや』と云った

『使いの者に行かせよう・・・なに、すぐに酒が届く』

驟雨は片瀬にそう云うと、筆と紙、それから硯すずりを奥の間から取ってきてなにやらさらさらと文字を書き出したかと思うと、その紙を庭に放り捨てた

片瀬は驟雨の行動をなにも云わずに見ていたが、いまいち何をやっているのかわからない

『おい、驟雨・・・紙に何を書いたのだ？ それより俺が買いたしに行こう。大体、この家にはお前と俺以外誰もおらんではないか』

片瀬が庭に放たれた紙から視線を驟雨へと向けたのはほんの一時の間だった

しかし、驟雨は片瀬の方へは向き直らず庭の一点を見つめたまま凝っとしている

そして。

『いつもの酒より、少し辛口なのを頼むぞ』

『かしこまりました……』

若い女の声だった

片瀬が振り返ると庭には誰も居らず、ほんのりと柚子の香りだけが漂っていた

『な、なんだ今の声は……若い女子の声がしたような気がしたんだが』

驟雨はきよろきよろと目を泳がす片瀬を見てくすくすと笑った

『私の式だよ。 柚子と云う名のな』

そう云った後、驟雨は杯に残った最後の酒を口に運ぶ

『式……そうだ式だ。 あの時もお前は式を使っていたんだっ
たな』

『……あの時とは？』

『惚けるなよ。長谷川邸の時のことだ、あの時も式を飛ばして情報を集めていたんだろ?』

『なんだ、知ってるんなら訊かなくても良いのではないか?』

驟雨はからかうように目を細めてい云った

『バカ! 俺はあやうく手籠めにされそうだったんだろ』

驟雨は細めた目をそのままに、はははと静かにそれでいてとても愉しそうに笑った

『手籠めか。それは良いが、男が女に手籠めとは普通云うまい? まあ、だが危ういところだったかもしれんぞ、骨抜きにされ、傀儡同様になっていたかもしれん』

『分っているさ。お前にも感謝はしている』

『それにしても、人は欲深き生き物だな』

『色欲か・・・』

いや、と驟雨が微笑う

『俺たちの場合は、色恋沙汰よりもこの酒に重きを置いているがな』

杯を軽く揺すりながら云う

『情けないことを云うなよ、そりゃあ女と縁がないのは認めるが、人間諦めたらそこで終わりだぞ？俺たちはまだ若い、成せば成るさ』

片瀬はそう云い切ると、杯に残っていた酒を一息に呑み干した

『ん？ ちょっと待てよ。そう云えば、俺はまだ驟雨お前の歳を訊いた事がなかったな』

『なんだ、今更そんな事を訊いてどうにかなるものでもないだろ』

『それはそうだが、良いではないか教えてくれ。俺よりは少し上なのは分ってる、そうだな三十五くらいか？』

『……そうだな、そこから十と一を引いた数』

『ん、三十五から十と一を引く……』

え……。

片瀬は半ば呆れ顔になりつつも、いつも自分をからかつては面白げにしている驟雨の事である。本来の年齢よりもずっと若いと嘯いて、またおちよくっているのだと思っただ

『おい驟雨、さすがの俺でも今回は騙されんぞ。幾らなんでも二十代ではあるまい？ たしかにお前は老けては見えんし、厳しい顔でもない。いつも飄々としてふざけているのか本気なのかかわからんが、お前の言動や着ている物の趣向は若者とは無縁の長物だぞ』

『 そんなに私は変か？ 』

驟雨はいつも以上にこやかにそう云った

『 嗚呼、変だ。 この際だから云うがなお前はどこか変なんだ。』

どこかと訊かれれば答えにくいのだが、お前を包む全体的な雰囲気
気がとても若者・・・あ、いや三十代にすら思えん貫禄が出ている』

それでも・・・

それでも俺は俺だよ、真一。

あの日、長谷川低での出来事の終末はこうだ

『 主人がこうなってしまったのは、今にして思えば、いいえずっと以前から自覚はしておりました。』

主人とは歳も離れておりましたから、ついでが若い男性を求めて
しまう。 我が家に使える使用人に、若い男性が入りますと、見境
無く寝屋を供にし、夜毎夜毎快樂を貪る日々を、きつと要には解っ
ていたのでしよう。 ですが主人も、要も自分自身の年齢に負い目
を感じていた分、私にはなにも云いませんでした。 はけ口の無い
感情を、主人は神具を盗むことで解消していたのではないでしょう
か・・・』

『 恐らくは・・・』 驟雨は静かにそう云う

『 驟雨様、私はなにをすれば良いのでしょうか・・・どうすれば

罪を償い、要に謝れば良いのでしよう』

『ご主人と、一晩お過ごしください。そして、心からのあなたの言葉を、聞かせてあげるのが唯一の方法でしょう』

千鶴子は静かにはいと答え、涙を流した

『それで、その後俺たちは長谷川邸を後にしたんだが、本当にあれで善かったのか？ もし鬼が暴れていたら、千鶴子さんは・・・』

『心配するな、真一。千鶴子殿はお元気だよ』

『ほ、本当かそれは！ 便りでも届いたのか？』

『いや、実際にここで観ていたからな』

『そうか・・・式を通して覗き見しておったんだな？ それならそうと俺に一声あっても良いではないか。まったくお前と云うやつは』

『千鶴子殿はきちんと役目を果たしたよ。それで善いではないか、俺たちはそれ以上語らう必要はない』

『ご免下さいませ。』

庭先の塀越しに女性の声が聞こえる

その気配は玄関口へと移動したかと思うと、もう一度

ご免下さいましね

と云つて、静かに家中へと入ってきた

『あら、もうずいぶんと吞まれてるんですね、少し遅くなりすぎたかしら』

長谷川千鶴子である

『いいえ、まだまだ宵の口。酒はこれからが旨くなる』

驟雨はにこにこした表情を崩さずに、さらりとそう云った

『まあ、それなら良かった』

驟雨のとなりにそつと腰を下ろすと、千鶴子は持参した酒を驟雨の杯へと酌をする

『今夜あたりに片瀬さんがいらっしやるからと驟雨様から誘われたときはとても嬉しかったんですのよ。私たち夫婦のことを気にかけて下さっているんだなって。要も今はずいぶんと顔色が良くなり、本当に感謝の仕様もございませんから』

『その分、しっかりとした報酬と酒を頂戴いたしました。当然のことではございます』

片瀬は突然の珍客に、一時あんぐりと口と目を開いたままであったが、次第に千鶴子との会話を愉しみ、酒を呑んだ

ゆっくりと時が過ぎ、それぞれはそれぞれの感傷を心に秘めているかのように、誰からとも無く口を開かなくなつた

時折、千鶴子が二人の杯に酒を注ぐくらいのもので、片瀬と驟雨はただじつと庭に咲く花や、空に浮かぶ月を見つめて酒を呑むばかり

風が庭から縁側に吹きぬけ、楓の葉が一片驟雨の杯に落ちた

『あらあら、これは風流ですこと』

『朱に染まる杯に、紅に染まる楓か……。たしかに儂い。』

『が、それ故に美しく感じるし、尊くも感じる』

『また難しいことを云うな、お前というやつは』

そう云いつつも、片瀬は自分の杯に葉が落ちるのを懸命に待っているようでもあつた

そんな様子を千鶴子は面白そうに眺めている。その時、千鶴子の紅く色づいた唇から嗚呼、と一言漏れた。手提の中からなにやら取り出したものは、綺麗に光る石であつた

驟雨が千鶴子に それは？ と訊くと、千鶴子にはにこにここと笑いながら石を驟雨の手の中に渡した

『それは驟雨様に差し上げます、さつき川原で見つけたんですよ。あんまり綺麗だったから、つい』

驟雨はしばらくその石を凝つと見つめていたが、一つ息を吐いて『ありがとう』とにこやかな笑顔をみせて礼を云った

結局、その“石”がどんなものであったのか。驟雨はその後語ることは無かったが、その石を庭先に飾り、しばらくの間祈りを捧げていたとも聞いている。

伽藍の檻（後書き）

この作品を読んで頂いた皆様、初めまして 独楽と申します。
処女作にして初投稿と云う事で、大変読み辛い箇所も多々あったで
しょうが、そこはなにぶんご容赦の程を賜りたくmm；

次回も、三舟と片瀬のお話が続きます。

ご期待下さい

名も無き名刀と魂

庭の山紅葉や錦木がすっかり紅く熟れた様に紅葉している。

縁側から観る庭の美しさが、驟雨は気に入っていた。

手入れがきちんと行き届いている割に、驟雨自身が庭の手入れをしているわけではなく、使役している式神に全て任せ、自分は美しく仕上がった庭の景観を肴に美味しい酒を呑む事を由としている。つまり三船驟雨とはそのような人物なのである。

その唇はほんのりと紅く染まり、酒に濡れている。

瞳は冷徹な煌きを放ち、森羅万象を貫いてしまいそうな視線を携えている。

人の存在は迷いや憎しみ、嫉みや苦しみの連鎖によってこの世に繋ぎ止められ形成される。だが、驟雨はその全てをさも超越してしまったかのような飄々とした表情をしている。不思議な人物だと、彼と接した者たちは口を揃えて云うだろう。

事実、彼には懇意にしている友人や勿論嫁に来るような女性も居らず、世間一般では青春と呼ぶ日常を、彼は知らない。

否、感覚としてや知識としてなら誰よりも熟知しているかもしれないが、如何せん経験がなかった。

完璧な人間などこの世には存在せず、完璧を求めるは人の性であ

ると、驟雨自身も常々思っていることである。

ただ、片瀬真一と云う人物に措いては、驟雨の持論も意味を持たない。

三年前に仕事の都合で出会った青年が片瀬である。

今も驟雨の隣に座して、酒をほろほろと呑んでは鯛の刺身を一切れ口に運んでいる。

『ん、うん。 いや、よく脂の乗った鯛だ』

片瀬は口の端に付いた醤油を右手の甲で拭いながら舌鼓を打っている。

『お前は魚を選ぶのが上手いな、真一。 こんなに旨い鯛を食ったのは俺も初めてだ』

驟雨は元々細長い瞳をさらに細くし、笑った

『だろう？ この間の鮎も実に旨かったが、なんと云っても魚の王様は鯛だな』

片瀬はそう自慢げに言った後、また一切れ口に入れた。

『それで、頼んだ物は手に入れてくれたか？』

薄く刺身にした鯛を喉の奥にしつかりと流し込んでから、じんわりと杯を口元へ、それから自慢げな表情になり、後ろに控えさせていた一振りの刀を驟雨の前にどかんと置く。

『見事な業物……。名刀菊一文字宗則だ』

深紅に染まる鞘は名刀の醸し出す独特の雰囲気を滲ませている。

おもむろに驟雨は宗則を手に取り、刀身をゆっくりと抜く。

ざらりと妖しい光を放ちながら徐々に刀身が抜き放たれ姿を現す。

『不思議だ、驟雨。お前が持つと、不思議なくらい絵になるな』

驟雨は柄を外し、なかこり茎を確かめた。そこにはしっかりと菊の文様が銘記されている。真正銘の菊一文字である。

『感謝しなければなるまいな。よくこの刀を見付けてくれた』

『なに、ちょっと親父のコネをつかったまでのこと、そう気になるな。それに、金を出したのはお前だしな』

それにしても と片瀬は真剣な眼差しで驟雨に云った。

『このような刀が必要なくらい今回の依頼は危険なのか？ 俺にはよくわからないが、何にしても死ぬような事だけはあってはならんぞ』

『大丈夫さ、俺はまだ死なん。ただ、今回はこの刀なくして恐らく成功は難しかろうからな。お前には無理を言った。本当に感謝しているよ』

お互いにそれ以上刀に関しての話はしなくなり、再び優麗な庭の情景を愉しみながら酒を飲み始めた。

秋と云う季節は、人の心を艶やかに彩るように。

秋と云う季節は、人ならざるモノの心までをも艶やかに奮い立たせてしまうのかもしれない。

それは誰が決めたものでもなく、また偶発的にと云うわけでもなさそうだ。何らかの因果をもって、モノの心、魂は動いてしまうものらしい。

例えばそれが秋でなくとも、例えばそれが夏であり冬であっても然り。

それら怪異を引き起こし、世に災いをもつて百害と成す。悪霊払いや祈祷師、陰陽師や霊媒師と呼ばれる類の者らにはあまりに非力。

八百万の神々はただ静観を貫き、人の世を正すも壊すも人次第と云わんばかりに。

『哀しい事だと、思わないか。 真一……』

『俺はそう悲観してはいないぞ？ 何にしてもお前がいるではないか。 この世界は広い。 だが、少なくとも俺の住むこの地にはお前が居てくれる。 それだけはいつも神様に感謝しているよ』

二人は呆つと庭先を見つめたまま、頬を紅く染めて酒を呑んだ。

片瀬の杯に酒を注ぎ、驟雨が云った

『今回の依頼は、少し厄介でな……。 解決策としてはお前

の手に入れてくれた菊一文字さえあれば良いのだが、俺は全く剣術の心得が無い。そこで梓巫女あずさみこを明日東北の霊山から招いている』

『あずさ・・・みこ？ それはどんな巫女様なんだ』

『梓巫女。 所謂イタコや市子と呼ばれる者達の事だ。 死んだ者の霊を口寄せできる能力をもっている特殊な人々だ。 時には政府の依頼を請けて神降しをしたりするが、殆ど山から下界へ姿を見せることは無く、恐らくその存在を知っている者はそうおらんだろ』
『う』

片瀬は眉根を寄せて、うぐんと唸っていたが、驟雨が『お前も明日来るだろ？』と訊くと、うむと答えた。

二

飯盛町の一等地に片瀬の邸宅がある。家主は片瀬籤一かたせひしごいち、片瀬真一の父にして何百年も前からこの地に住まう地主である。

片瀬家の所有する土地はこの飯盛は勿論のこと、他町他県に及び、片瀬家七代先まで悠々自適に暮らせるほどである。

そんな片瀬家の嫡男として生を受けたのが片瀬真一なのだが、この男、自他共に認める道楽癖がしばしば見受けられる。学生時代に

は喧嘩で何度か警察沙汰にもなり、家の家財や貴重な品を質にいれては金に替え、遊び歩く。

そんな片瀬を見兼ねた籤一は、ある日真一を呼び出し仕事に同行するように告げる。もちろん真一は難色を示したが、断れば勘当だと云われ渋々了承したのである。

その仕事とは、片瀬家が所有する物件の一つで旅館を経営している女将から『最近ご宿泊してくださるお客様がとんと減りまして、原因を調べてみるとどうやら幽霊が度々目撃されているらしんですけど、私どもではどうにも対処できません』と云うのだ。

そこで片瀬籤一はこの地に住まう霊媒師「三舟驟雨」に袂いの依頼をしたのである。

片瀬真一と三舟驟雨の出会いはその旅館が、まさに最初の出会い。

『しかし、驟雨と出会ってからずいぶん経ってしまっただが、あいつが自宅に女性を呼ぶなんて初めての珍事。これは楽しみだ』

三舟宅に向かう道中、真一は終始にやにやとした顔つきであった。

飯盛町の外れにある仙道川を真っ直ぐに東へ歩いて行くと次第に竹林が見始める。そこを突き抜け、石畳を踏みしめてしばらく行けば三舟驟雨の住まう春日造のまるで立派な神社のような風体の屋敷が姿を現す。

『驟雨、入るぞ』

片瀬はそれだけ玄関口で叫ぶと、遠慮なく屋内へと足を踏み入れ

た。

家の中はしんと静まり、まるで人の生活観と云うものが感じられない。この家に入る者はきつと誰しもがそう云う不思議な感覚に陥るだろう。片瀬も昔はそうだったが、今ではこれが当たり前だと認識しているので特に驚いたりはいしない。

家の中央に長い板張の廊下が続き、突き当たりに客間がある。

『驟雨……、やはりここに居たか』

片瀬が濡れ縁で座している驟雨に声をかける。

『客人はまだ来てないのか？』

『真一か。不思議なことを云うのだな、客人ならもうお前が尋ねて来ているではないか？』

酒の入った杯を傾けながら、三舟驟雨は愉しそうに云う。

『違う！ 昨晚お前が東北の巫女を呼んでいると言ったではないか』

驟雨は静かに声を漏らしながら笑うと、片瀬に杯を渡した。

『まあ、一杯吞もつ』

『う、うむ……。』

『梓巫女のことなら、もうこの屋敷に着いて居るぞ。長旅で疲

れている様子だったのな、今は風呂に入ってもらっている』

『なるほど、風呂か。それにしても梓巫女とはどんな女なのだ？ やはり巫女と云うとそれなりに修行を積んだ者なのだろ？ 皺くちやの婆さんか？』

驟雨は片瀬がなぜそんな事を自分に訊くのか、すぐに察してはいたがあまりに純真と言うよりも子供っぽさについて笑みを零した。

『そんなに気になるのなら、自分の眼で確かめれば良いさ。どうやら風呂から上がられたようだ』

片瀬はそう告げられると、杯を手にしたまま客間の入り口、襖をじっと見据えた。

廊下を確かに人が歩いてくる気配がある。

ぎい……ぎい……ぎい……と近づき、やがて客間へそつと姿を現す。

片瀬の杯がぼとりと畳に墮ちる。

『……驟雨様、大変よいお湯を賜り本当にありがとうございます』

白髪、 否

銀色に近い頭髮の色、透き通る真珠のような白い肌にほんのりと

朱が差している。風呂上りの色香を漂わせ、紅い長襦袢ながじゅばんを纏った若い女が、なんとも柔らかい声色で驟雨へ三つ指をつき、挨拶をした。

『旅の疲れは癒えましたか。こちらへきて一杯どうです?』

『はい』

女は消え入りそうな程小さな返事をする。

肩までに揃えられた髪を静かに掻き揚げて、驟雨の隣に座った。

片瀬は女が入ってきてからと云うもの、まだ一言も言葉を発しておらず、ただただ女に見入っていた。

すると、驟雨から杯を受け取った女が片瀬の方を見る。片瀬はその時我に返ったのか、あ、と小さく言葉にならない声を出した。

『貴方様が驟雨様の無二のご友人、片瀬真一様でござりましょうか? わたくし、名を八重と申します。片瀬様の御尊は度々驟雨様に聞かされておりました。このように美丈夫な殿方とお仕事ができるなんて、八重は幸せにございます』

すらすらとそれだけ述べると、ささ一献。と徳利を持って真一に酌をする。

その仕草がまたなんとも艶やかで色がある。真一は酒とはまた別の理由で頬を紅くしながら照れくさそうに杯を差し出した。

『ははは、真一めなぜ照れている? 八重がそんなに気に入ったのか』

驟雨は実に愉しげに片瀬真一をからかう。

『まあ、驟雨様・・・ わたくしなど卑しいモノを片瀬様が気に入るなどと』

八重は自嘲気味に笑う。

『お、おい・・・ 驟雨、冗談も程ほどにせんか。 お、俺はだなあ』

語尾を濁らせながら言葉に出来ず、最後は酒を流し込んで投了してしまう。 当の片瀬は少しだけ不思議に感じていた。

この八重と云う美しき巫女。 驟雨とは随分と古い仲のような雰
囲気を醸し出してはいるが、このように美しい女の話に驟雨は一度
もしてくれたことはない。

「いや・・・」

この八重に限ったことではない。 いくら浮世離れしているとは
云え、驟雨も若い男なのだ。 浮いた話の一つや二つあっても良さ
そうなもの。 驟雨にはそれが全く持ってない。 自分が色恋の相談
をしてみると何かと助言や為になる話をしてくれるのだが・・・

『ところで驟雨、その・・・なんだ。 や、八重さんとは古い仲
なのか？』

片瀬は頭でもやもやと考え込むのを由とはしない性格である。
訊きにくい事でもある程度は踏み込んでいってしまう自分に時には

感謝している。

片瀬の問いかけに、八重と驟雨は二人眼を合わさずに

『ああ』

『ええ』

と同時に答えたのだ。

それから

『心配するな真一。八重とは古い付き合いだが、お前が危惧しているような仲ではないよ』

『まあまあ、わたしと驟雨様が恋仲にみえましたか？』

『ち、違うのか？俺はてっきり・・・』

益々赤面する片瀬を肴に、三人は濡れ縁に座し、心地よい夜風に髪をゆらし、草花の匂いに鼻を躍らせ、酒をこくこくと呑んだ。

どのくらい時間が経ったのか。

三舟邸には時計と云うものが一つも置かれていない。ではどうや

って時間を計っているのかと訊かれれば、きっと驟雨は微笑を浮かべて何やら小難しい事を述べるに違いない。

そんな事をぼんやり考えていると、庭に一輪の牡丹が咲いているのが目に付いた。

しかし、片瀬は事有る毎にこの濡れ縁で驟雨と酒を囲っているが、庭先に牡丹など観た事はない。なにか不思議な感じの牡丹であった。

『なあ驟雨、牡丹の花が咲いているが……。いつからあそこで咲いているのだ？』

驟雨は片瀬の言葉を聞いているのかいないのか、ふわりと立ち上がると、まさに片瀬が気にかけてた牡丹を摘み、濡れ縁へと戻ってきた。

『よくこの牡丹が視えたものだな、真一。私と供に居ることで力を授かったのかもしれないぞ？』

『それはどう云う意味だ？ 普通の牡丹ではないのか？』

『どうですか？』

八重は心持神妙な顔つきで云った。

『どうやら、また斬られたようですな』

驟雨は牡丹を掌に乗せると、やさしく息を吹きかけた。

驟雨の掌から離れた牡丹は空中で飛散し、地面へと墮ちる。が、

地面には牡丹の花びら一片たりとも残ってはいない。完全に消えてしまっていた。

『なあ真一。こんな噂を聞いた事はあるか？』

驟雨はゆつくりと語りだした。

その噂とはこうだ。

今からおよそ一月前である。

ある若い夫婦が京都の三条橋を通り掛ったところ、前にゆらりと人影が現れた。夫婦は気にせずそのまま橋を渡ろうとしたが、人影とすれ違いざまに「人斬り……おき、た。知っている力」と言葉をかけられ、夫の方が「存じませんが」と返事をする、影が刀のような物を抜き、夫をばっさりと斬ってしまったそうだ。

妻の方はすぐに逃げ出し、命は助かったらしいのだが、後日警察にその事を話しても信用してはもらえず、数日後に自殺したそうだ。

それからこの事件と似たような事が日本各地で起き、つい先日、この飯盛町でも起きてしまった。

『その事件なら俺も今朝新聞で読んだ。だが、あれはただの辻斬りではなかったのか？』

『わたしも最初はそう思っていたが、最初に被害にあった夫婦の妻』

『京都のか？』

『そうだ。その妻の親族から私に依頼があつてな。その自殺した女の遺書をよこして来たんだ』

『遺書・・・だと』

その遺書にはこう書かれていた。

拝啓、父上様母上様。

まず、先日起きた事件のことで大変なご迷惑をおかけしましたこと、深くお詫びいたします。

けれど、夫が怪異によって斬り殺されたのは真実でございます。ですが警察では信じてはもらえませんでした。

それは当然のことなのかもしれません。ですが、今この筆を認めている最中も、私の後ろにはあの日夫を斬った怪異が息を吐いて私を見えています。

悔しい。悔しい。

お願いでございます。どうかこの親不孝な娘をお許し下さい。そして

先立つ不幸をお許し下さい。

願わくば、私と夫を斬ったこの人ならざる物の怪を

この世から払っていただきとうございます。

『ふむ……。これはまたなんともおぞましい限りだな』

片瀬は驟雨から渡された女の遺書を、神妙な面持ちで驟雨へと返した。

『この遺書に記されていることは真実であろうな』

『判るのか？』

『ああ。八重にも霊視してもらった。間違いはない』

『その手紙の文面、墨、紙にいたるまで全てに激しい恨みと恐怖それから強い邪気を感じましたので、まず間違いはありませんでしょう。それに、今しがたも驟雨様のはなつた式がその物の怪に斬られてしまいましたね。式神とは云え、痛かったでしょう』

『式……。まさか先ほどの牡丹か？』

『そうだ。残念だが、この近辺を探らせていたんだがどうやら斬られてしまった。心配するな、土に還すことでまた花として生まれくる』

『そ、そうか……。ん？今、この近辺と云ったか？』

『云ったぞ』

『な……。なにを呑気な。この近辺まで妖怪のようなもの』

が来ているのだぞ！ 酒など呑んでいる場合ではないではないか』

片瀬は血相を変えて辺りをぐるぐると見回している。

『心配するな。この屋敷には結界をしてある。邪なるものからは一切みえぬ』

『そ、そうだとしてもだ……』

『片瀬様、ご心配なさらずともそろそろ物の怪を払う準備が整いました』

八重の白粉を塗ったような白い肌に、酒のせいかほんのりと朱みがさしている。

酔ってはいないよだが、片瀬は八重の云っている準備の意味がまったくわからない。

『今まで酒を呑んでいただけなんだが、いったいどんな準備が整ったと？』

驟雨は口元に笑みを浮かべている。

『このお酒を呑むことこそが準備なのですよ。神降しや死者の霊を降ろすとき、まず湯浴みによって体の外を浄化し、酒によって中を浄化する』

『つまり、真一とわたしは八重の準備を手伝っていたことになる』

驟雨が続けて云った。

片瀬はというと、なんとか合点がいったのか。杯にのこっていた酒を豪快に飲み干すと

『行こう』と云う。

『ああ、行こうか』

驟雨もそれにならう様に酒を一気に流し込み、立ち上がった。

『おい、ここは……』

驟雨のすぐ後ろを歩く片瀬は、この三舟驟雨と云う男の全てを見つめる事など到底不可能だときちんと理解していた。

三舟驟雨の人間臭さや、それとは真逆の素顔も彼は窺い知ることを是とはしていない。

それにしても。

此処は一体なんなのだ？

『なんだ、まだ真一には案内したことはなかったか？ 此処は舞台だ』

驟雨は横にいる梓巫女の八重を見る。

その視線に気がついたのか、八重は後ろできょとんとしている片

瀬に向き直り、驟雨に変わって「舞台」について説明する。

『驟雨様の邸宅の西。まさに此処の、まるで能の舞台のようなこの場所こそが私たち巫女が神を降ろす時に用いる場所。神聖なる場所なんです』

『たしかに……この間観劇に行った能の舞台と似ているなあ。ここでどのようにして神を降ろすんだ？』

三人は舞台のちょうど役者が最初に出てくる細い通路。橋懸かりと云うの所に立っていた。

舞台の中心を支えるように、四隅にそれぞれ柱が立っている。その柱のすぐ傍に松明が夜の闇を払いのけるように燃え上がり、舞台全体を照らしている。

『舞うのです。倭琴やまひつりの音色に舞い、自然の音色と舞い、神と魂の調和をはたして』

『巫女の神楽舞いは、美しきものだ……。真一は正面で座って観ているといい。声を出して良いと言つまでは、何があつても喋つてはならんぞ？』

『わ、わかった……。』

片瀬真一はしっかりと頷くと、舞台の正面、これが能の舞台なら観客でいっぱいであろう場所に腰を下ろし、舞台を凝つと見つめた。

八重と驟雨はなにやら小声で話し込んでいたが、それも終わった。

梓巫女である八重は舞台の中心に立つ。巫女の装束に着替え、両の腰には小さな鈴をつけていた。その鈴が、風に揺られて鳴る。

驟雨は舞台の後方、八重の立つ場所から左後ろに座している。その驟雨の手元には古びた琴が置かれている。

三度、鈴の音が鳴った時。

八重の右手がゆらりと上がった。

それに続いて幽玄な琴の音色が辺りを包み込む。

神を降ろす儀式の、神楽舞いが始まった。

雲の流れのような八重の舞いと、小川のせせらぎのような琴の音が混じり合い、この世の物とは思えぬ心地良さに片瀬は次第に身を任せるように眼を閉じ、時折聴こえる鈴の音が、辛うじて自我を保たせている。

体から体重が消えてしまったような、そんな不思議な感覚。

眼を閉じていても、八重の舞う姿が視える。驟雨の鮮やかな指捌きが手に取るように判る。

夜の美しさとは、まさにこの日の為に用意されていたのではないか。そんなことを考えてしまう。酒に酔う心地良さとはまた違う。

これが神楽舞い……。

時間にしておよそ一時間か二時間か。

驟雨や八重にはそれが分っているのか、分っていないのか。

片瀬の眼には八重の美しく艶やかに舞う姿を写すことしか、今は出来ていなかった。

その時である。

『真一、もう声をだしても良いぞ……』

頭の中に驟雨の音が直接響いてきた。

『……、しゅう……う』

一言そう述べると、片瀬の自我は瞬く間に覚醒した。

『驟雨！ お、終わったのか？』

舞台上に眼をやると、驟雨とぐったりとうな垂れた八重の姿が確認できる。

『八重さん……』

真一は舞台上に駆け上る。

ぐったりとした八重を驟雨が抱き起こしている状態だ。

八重の意識はなく、だらりと両腕が垂れ下がっている。

『驟雨、八重さんは大丈夫なのか？』

驟雨はしばらく八重の顔を見つめていたが、片瀬の問いに

『ああ……成功したようだ』

『え……？』

ドクンツ……

八重の全身が大きく震えたように見えた。

ドクンツ……。

間違いない。八重の体が大きく震えた。

『眼を覚ます』

驟雨の言葉とほぼ同時に八重が起き上がった。

その動作はまるで人とは思えぬ動きをみせて起き上がったのだ。なんと表現したら良いのか、まるで重力を感じていないような無機質な動き。

驟雨は突如として立ち上がった八重に向かって、声をかけた。

『……新撰組、元一番隊長 沖田総司様 で、ございませるか？』

八重はその言葉に反応したのか、ゆっくりと驟雨に振り返った。

その双眸は先ほどまで一緒に酒を呑んでいたあの優しげな瞳ではなく、ぎらりとした眼光を携えた……まるで武人のそれである。

『『い……いかにも』』

八重の口から発せられた声は、明らかに八重の声ではなくなっていた。

男性的でも女性的でもない中性的な声の質感は、どことなく不気味でもあり、春の陽だまりのようでもある。

片瀬は驟雨を見た。

驟雨は今、八重に向かって新撰組の沖田総司と呼んだのだ。

片瀬は歴史家ではない。だが、新撰組とその隊士の中でも屈指の剣客であった沖田総司を知らぬほど無知でもない。

しかし、と片瀬は我を疑う。

八重に向かって驟雨は沖田総司 そう呼びかけた。さらには『『いかにも』』八重はそう応えた。これはどうということなのだ……。

頭では理解していても、片瀬は現実として認識できていない。

神降ろしと聞いていた片瀬は、まさか神ではなく死者の魂 それも当然の昔に亡くなった者の魂をその身に宿らせることだったか。

夜が更に深まる。

舞台の灯火は今も尚煌々と萌え続けているが、その明かりがやけに不気味に思えた。

驟雨の呼びかけに応えた以外は何も言葉を発しない。片瀬は八重に恐る恐る近づこうと、一步步み寄ろうとした時、隣にいた驟雨が片瀬の体を自身の方へ無理やり引き寄せた。

ものすごい勢いで引つ張られた片瀬は、元いた場所が粉碎しているのによつやく気づく。

ほんの一瞬の出来事であった。

『な……なにがあつたんだ？』

『真一、あまり不用意に八重の側に行かん方が身のためだぞ。』

今も俺がこうして引いてやらねば、沖田殿の剣圧に潰されていたところだ』

片瀬は尻餅をついたまま、舞台の板がばきばきに潰れているのを確認する。

そしてその中心には息を荒げた八重が、眼光鋭くこちらを睨み付けている。

『今はまだ魂の癒着が不安定なのだ。だが、もう暫くすれば自我を取り戻されるだろう』

驟雨はそう云うと、なにやら呪を唱え始めた。

すると、方を上下させて息を荒げていた八重は徐々に落ち着きを取り戻し、ばたりと崩れ落ちたのだった。

三

『……………ううは。』

どこか中性的な声と容貌をした男が、ゆっくりと目蓋を開けて、意識を取り戻した。

『現世でございます。 沖田殿』

『げん……………せ。 だと』

『ええ……………』

驟雨が「沖田」と呼んだこの男。元は八重と云う梓巫女のものであるが、今は呪がかけられており、見た目にはまるつきり若い男性である。

『……永い眠り。如何な理由にて妨げるのか』

透き通るような美しい声だが、これがあの沖田総司と云う人物なのだろうか？

『はい。今の世…… 最初に言うておきますが、江戸にあらず。もちろん明治と云う時代もすでに過ぎてしまいました。』

それほどの時が経った今、現世ではある辻きりが横行しております故、こうしてあの世から貴方様を呼び戻しました』

沖田はゆっくりと瞳を閉じ、口を開いた。

『解せませんね……。死者を呼び戻す理由には到底ならぬ』

『確かに。ですが、この辻斬り……。どうやら沖田総司を名指しで夜毎夜毎さまよい続けている様子。もちろんこの世のものではないので人間では殺せません』

『私に、何を望むのか……。？』

『この辻斬りを、斬っていただきたい。これは貴方がこの世に残したしこりに御座います』

『わたしの……。しこり？』

『左様で御座います』

沖田はしばらく驟雨の眼を凝つと見つめた。

驟雨は平然とした顔で見つめ返していたが、この時、お互いの意思疎通のようなものが成されていたのかも知れない。

布団から右腕を出し、ゆっくりと上体を起こす。

かなり華奢な体つきではあるが、四肢は筋肉質で理想的とも云える肉体をしているのが分った。

鬚はしっかりとしてある。あとで驟雨に訊いたところ、整然死ぬ間際の格好なのだそうだ。

真っ白の肌は、どこか八重と重なる部分がある。

『……私は、生前人を殺めすぎた。ようやく眠りについたかと思えば、また誰かを殺めなければならぬとは。世の因果か、私自身の性なのか』

『新撰組隊士として、幕末の京を戦い抜いた貴方だからこそその因果。そのしこりが今世を騒がせている。協力して頂きますね？』

沖田はゆっくりと立ち上がった。

『……刀は、ありますか？』

『沖田様の愛刀「菊一文字則宗」は用意しておりますよ』

ぶ厚い雲が、夜の闇を更に深め、月を遮っている。

それでも、一行は一切の迷いなく只管足を前へ前へと進めて行く。最後尾を歩く片瀬は、驟雨と八重の身体に憑依している沖田の背を時折見つめては、小さくため息を零す。

これははたして現実なのだろうか。それとも俺は驟雨と云う稀代の霊能者に夢でも観るように呪詛でも懸けられているのではないだろうか。

そんなもやもや、と云うよりも不安の波が押し寄せては返し、また押し寄せてくる始末。

驟雨にこんなことを訊いたところで、これが現実であることは自分がよく解っている。

これまでも幾つか驟雨の仕事に付き添っては同じ不安を感じているのだから。今回だけが夢であるはずも無い。

しだれ柳がずらりと並ぶ路を、三人は黙々と歩いていく。

夜の帳はしんと張り詰め、今にも辻斬りが出てきそうな雰囲気である。

柳並木のすぐ下は斐伊川がさらさらと音をたて流れている。

しばらく歩いていると、やがて三叉路に出た。どちらに行くのだろうか？ と片瀬が考えていると、三叉路のそれぞれの道の先から、三匹の螢が尾を煌々と輝かせてやってきた。

三匹の蛸は驟雨の肩にとまる。

すると、驟雨がおもむろに一番右側の道を進んで行く。

片瀬は合点がいった。

おそらくあれは驟雨が放った式神だろうな。

三匹の蛸は少しの間、驟雨の肩に停泊していたが、一匹が飛び立つと、それに続いて他の二匹も夜の闇に姿を消した。

・
三人はさらに歩み続ける。いったい目的地はどこなのだろうか・
・
？

片瀬は少しも和らぐことの無い不安感を募らせながらひたすらに驟雨と沖田を見ていた。

もつどのくらい歩いただろうか……。

こんなことなら車で来るのだったなと不安の中に後悔が入り混じり始めた頃。

『ここか……』

驟雨がぼつりと云った。

『たしかに、ここには不思議と懐かしい匂いがしている』

沖田総司は瞳を閉じて、深く深呼吸しているように見えた。

一見して美しい顔立ちの若い男性にしか見えない沖田は、本来は八重と云う梓巫女に憑依している霊体でしかない。

生身の人間のように見えているのは、ひとえに八重の能力がそれほど優秀であることの裏返しでもある。

青と白のんだら模様が新撰組の装束であることは様々な小説で読み知ってはいたものの、実際に見てみると、感慨深いものがある。

それも新撰組で一番強いと評判の一番隊長 沖田総司が着ているのである。 沖田と対峙してきた幾人もの侍は、どう感じていたのだろうか。

憎い 悔しい 恐い それとも嘲りか。

沖田は一見したところ虫も殺せぬほどに優男である。

しかし、片瀬はそれが沖田総司の一部分でしかないことをよくよく窺い知っている。

『真一、もってきた酒をこの鳥居の側に撒き散らしてくれ』

三人は暗闇の中に佇む古びた神社に来ていた。ここに例の辻斬りが居るといっただろうか？

片瀬は驟雨に云われるがまま、小瓶に入った日本酒を地面に向かって撒き始める。

鳥居を中心に円を描くように酒を撒く。

酒が地面を濡らし、薄暗い痕が円を形作る。

その痕に、驟雨は数枚のお札を貼り付けていく。

『これは一体なんの準備なのだ？』

『・・・ふふ。 まあ、あとは辻がくれば解るさ』

歩いてきた道の先を見る。

暗い柳の葉が擦れる音と、すぐ側を流れる川の音とが混ざり合う。

永遠に続く黄泉への路を連想させるほどの不気味な空気が、片瀬真一の肌を粟立たせる。

遠くの方で犬の遠吠えが聞こえると、それに呼応するかのようになんか次々と鳴き声が響きあいだした。

『犬が吼え始めた・・・。 そろそろ来るぞ？ 真一、覚悟はいいか』

驟雨はいつもの微笑を口元に浮かべたまま、片瀬に訊いた。

『う・・・うむ。 大丈夫だ』

沖田は終始じっと今来た道の先を見つめたまま、一言も言葉を漏

らさない。

犬の鳴き声が徐々に収まりだした、深夜一時を過ぎた頃である。

柳の揺らめきと似た黒い影のようなものが、遠くにゆらりと現れた。

影はゆらゆらとした動きで、ゆっくりと、しかし着実にこちらに向かって歩いてきているのだ。

歩いてきている、と云う表現は間違いないのかもしれない。影が近づくにつれてそれが歩いているのではなく、ゆっくりと浮遊したまま足を動かさずに驟雨たちの居る神社の鳥居に向かってきていたのである。

『お・・・おい。 あいつ、やはり人間ではないぞ』

『初めから人間では無いと、云ったはずだぞ？』

『それから、真一・・・。 鳥居の内側に入っていた方がいいぞ。 外側に居たら斬り殺されてしまうかもしれん』

『ツ・・・そ、それを早く云え！』

片瀬は大急ぎで鳥居をくぐり、樹木の陰に隠れて静観を貫く姿勢をとる。

『あやつ・・・。 何故だろうか、とても懐かしい匂いがする』

『靈臭・・・とても云いましょうか。 生前の記憶・縁えにしが関係し、

それが貴方には理解できる』

『アレが私を求め彷徨っているのも、生きていた頃の縁だということか……？』

『はい。人には魂が御座います。そしてそれは物にも然り』

『物にも魂が宿る……』

『人の情、想い。様々な経験を通して培われる魂。それを人は「九十九神」（つくもがみ）と呼んでおりますよ』

『つくも……か。百年もの歳月が物を神に変えてしまうのだな』

『この世とはまこと、不可思議なものでございますから』

驟雨と沖田が鳥居の前に並んで立ち、そのすぐ前方には、黒い影だったものが今ははつきりと人の姿に変わっている。

襪褌布を纏った大男が、そこには立っている。

腰には一振りの日本刀を差し、沖田と驟雨を凝つと見据えている。

表情は判らないが、口元からは息遣いの荒い声だけが漏れ出ている。

『沖田様、アレを斬ることで不浄を払うことは出来ません』

『承知している……。アレの正体を突き止め、想いを遂げ』

させてやらねば、解決せぬのだろ』

沖田総司は、静かに腰に携えた「菊一文字則宗」を抜き放つ。

その動作と寸分違わぬように、影もまた刀を抜く。

『……この感覚。 久しぶりだな』

沖田は少年のような豊かな表情をほんの一瞬覗かせた。しかし、他の誰もその僅かな沖田の変化を確認できた者はいないであろう。

『沖田様……、きます』

『元新撰組隊士 沖田総司、参る』

二人は同時に切り込んだ。

二つの刀がぶつかり合う音が辺りに反響するより早く、両者は次の行動に出ていた。

『流石ですね。 人の領域をとくに超越している』

驟雨は無数に飛び散る小石や枝屑などを冷ややかな顔つきで避けながら、そう云う。

沖田の動きが更に速度を増した。

次々に繰り出される平突きを、辻斬りもよく交してはいるが、徐々に防戦一方となってきた。

そして、辻斬りが沖田の刀を受け流しきれずに刀を落としてしま
う。

その隙を逃すような真似はしない。

沖田が放った一閃が、辻斬りの深編笠ごと首を跳ね飛ばしたのだ。

笠は宙をふわふわと舞い、そして地面へと落下する。

しかし、斬られれば笠と同じくして地に落ちなければならぬも
のが、どこにも無かった。

【首】である。

笠の中は空であるし、着られた胴体にも首はない。

沖田は一步後ろへ下がり、驟雨に訊いた。

『あやつには首がないのか？』

『どつやらそのようですね。本より人ならざるものでございま
すから』

しかし と驟雨は続けた。

『沖田様とあのモノ…… 剣筋がまったく同じに思えたのは、
気のせいでしょうか？』

沖田もそれには納得したように頷いて『その通りなんだ』と不可

解な顔を示した。

『剣を交えてみて私も気がついたのだが、構えや太刀筋が私と・・・強いて云うのなら、天然理心流そのものだった。 どうしてでしょうね・・・・』

辻斬りはふらつきながらも、再び笠を頭に被せ、刀を構える。

『少なくともアレには人の怨霊とは違ったものが宿っております。それは沖田様。 あなたにしか理解し得ぬものだと感じるのです』

『嗚呼、それは理解している・・・。 もう少しやつと剣を交えてみるさ』

沖田は再び刀を正眼に構え、じりじりと距離をつめた。

互いの剣先が喉元にまで近づいた時、先に仕掛けたのは沖田であった。

喉元に伸びていた剣先を殺さず、全身のしなりを駆使し、神速の突きを繰り出す。

遠くで見守っている片瀬には、沖田が素早く一度突きを出したかのように見えた。

だが、凄まじい衝撃と刀と刀の擦れ合う音は三度聴こえ、辻斬りの体には、三箇所に切り傷 と云うにはあまりに大きな穴のようなものが穿かれていたのである。

世に云う【三段突き】である。

『『ワ……、ワレヲ、ワレヲ、ステタ…… 一、このカシ
ユウ、ヲ……ステタ』』

人の声ではない。 なにか獣が辛うじて人の言葉を話しているよ
うな、禍々しい声である。

『やはり……やはりお前は加州清光か』

沖田は刀を鞘に納める。

『……加州清光？』

驟雨は思案深い顔をし、何かを思い出そうとした。

『『ワ、ワqれをs……土明日y歩会つい亜sづあいs午後後
才大尾おおおお大才才大才才大才才大才才大才才大才才大才
才大才才大才才大尾おおおおおおおおおおおおおおおおお
お大尾おおおお大おお才おおおおお才おおおおおおおお大おお
大おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお大おおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおお大おおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお』』

凄まじい怒号と共に、禍々しい邪鬼へと姿を変えた辻斬りは沖田
へ一直線に向かってきた。

瞬く間に距離を詰めた辻斬りは、右の腕を振り下ろす。

もはや刀などと云える代物ではない、辻斬りの腕と一体化した爪
で攻撃を加える。

沖田は辛うじて攻撃を受け流すが、あまりの衝撃に本来は八重の体が悲鳴をあげた。急激な身体の上昇に、付いて行けなくなったのだ。

沖田の全身がガクリとその場に膝を付くと、そこを躊躇なく鬼へと変貌した辻斬りの今度は左の爪が沖田の頭めがけて振り下ろされた。

地響きのようにこの大知が振動する。

土煙が巻き起こり、辺りを覆い隠す。

『………おや？　こんなものですか』

驟雨がその煙の中に居た。

いつの間にそこへ移動したのか、遠くにいる片瀬にも分らなかった。

驟雨は振り下ろされた辻斬りの大きく研ぎ澄まされた爪を、鉄扇を持って受け止めていたのである。

『『ぎがが……がああああ』』

この世の恨みを全て吸い尽くしたかのような形相の辻斬りに、驟雨はつとめて飄々とした表情を向けながら軽口をたたく。

『くつ……すみません、三舟殿』

沖田はまだ全身の筋肉が痙攣しているのか、片膝をついたままである。

『いえ、漸くこの物の怪真名が解りましたからね。沖田様のお陰でございます』

そう云うと、驟雨は鉄扇を大きく振り払い、辻斬りを後退させると、三枚の人型に切り取られた紙の人形を辻斬りのそれぞれ頭、右肩、左肩と素早く張り付け、なにやら呪を唱え始める。

三枚の人型が黄金色に輝きだしたのはその直後である。

驟雨はひたすら呪を唱え、徐々に辻斬りへと近づいていく。

驟雨が一步近寄れば、辻斬りの鬼は一步下がり、また驟雨が一步近づけば、一步下がるといった風に足を後退させている。

数分後には先ほど驟雨達三人が居た、神社の鳥居のそばに辻斬りは誘導されている。

そして……

『さあ、その呪縛円の中に入るのだ、加州清光』

驟雨がそう辻斬りに命令すると、最初に片瀬が酒を撒いた結界の中に辻斬りは何か見えない力に抵抗するように、だが確実に円の中に納まった。

『真一！ 沖田様をここまで運んできてくれないか？』

事の成り行きをじつと手に汗握ったまま見ていた片瀬は、固まっていた自分の体を奮い立たせて、沖田がしゃがみ込んでいる場所まで走ると、そのままおぶると、驟雨の側まですぐに連れてきた。

『沖田殿、このモノの魂。あなた様にしか癒せませぬ』

『ああ……。二人とも迷惑をかけたな』

沖田総司はそう呟く。

『あの時、鳥羽伏見で見つけてやれなんだ恨み。お前を忘れたわけではなかったのだ。許せ……。清光。お前は良き刀であった』

辻斬りの全身から淡い光があふれ出した。

すると、同じ光が沖田からも溢れ出て、その光が徐々に弱まっていくと、辻斬りはもうどこにも居なくなっていたのだった。

沖田は、本来の体の持ち主である梓巫女の八重へと戻っており、今は気を失っているようだ。

片瀬。

驟雨がぼつりと云った。

『帰ろうか』、と。

終章

朝の陽が、零れている。八重は寝ぼけ眼にそう感じた。

『ん？ 気が付かれたぞ！ 驟雨』

片瀬の元気な声が聞こえた。八重はなんだか少しだけ安心感に包まれるのと同時に、全身に痛みが走った。

『ッ、』

『、あまり無理をしない方がよろしいですよ。八重』

驟雨が襖を開けて入ってきた。

『いいえ、このくらい平気でございます』

『これはこれは、なかなか男気に溢れている』

驟雨はくすりと笑った。

『驟雨様、すべて終わりましたか？』

八重は安らかな表情で驟雨に訊いた。返ってくる答えはかならず、八重が想像している通りであると、確信しているからだろう。

驟雨は頷く。

『あなたのお陰です、八重。しばらくはこの家に逗留し、体を休めると良い』

『で、ですが、私は卑しい身の上。驟雨様のお役に立てたのなら、これ以上ここにいてはご迷惑が』

八重の言葉は途中で途切れた。

『いいえ、私はあなたにここに居てほしい。その方が、真一も喜ぶ』

驟雨は襖の向こうで耳をそば立たせている片瀬に聞こえる様にわざと声高にそう云った。

照れくさそうに頭を掻きながら、片瀬が部屋に入ってくる。

『まったく、気が付いているのならそう云えよ』

『ははは、八重の看病は一晩中真一がやってくれたのだ。礼を言つてやりなさい』

『そ、そうだったのですか、こんな私の為に片瀬様に多大なご迷惑を。なんとお礼を申し上げたらよいか』

再び、八重の言葉を驟雨が止める。

『八重、一言だ。一言でいい』

『……、ありがとうございました。片瀬さま』

片瀬に向かってにこりと微笑む。

『ほらみる、真一めもう顔が真っ赤だ』

驟雨はおなかを抱えて笑った。

それにつられて八重も笑う。

片瀬は真っ赤にした顔を驟雨に悪態つきながら、それでも最期にはつられて笑った。

それから数日が過ぎて。

夜風に髪をそよがせ、濡れ縁で酒を呑む驟雨が一人で居た。

着物の裾が擦れる音がして、驟雨はゆっくりと背後に眼をやると、八重が立っていた。

『どうしました？ そんなところで立っていないで、こちらで酒でも呑みませんか』

驟雨の誘いに、小さく返事をする八重。

『驟雨さまと片瀬さまのお陰でございます。人からこのように厚遇された事などございませんでしたから』

驟雨は楽しそうに杯を傾ける。

『幸せとは、このような気分を云うのでしょうか。まるで夢を、夢を観ているようです』

八重と云う人物について、驟雨も詳しく存じている訳ではなかった。ただ、以前世話になった老巫女の元に引き取られ、その跡を継いだ少女が八重である。

まだ老巫女が生きていた頃、数度驟雨が尋ねたことがあり、その時に何度か話した程度であったが、驟雨の頭にはしっかりとあの時の少女が記憶されていた。

そうでなければ、今回危険を冒してまで仕事を依頼したりはしなかっただろう。

『あなたは優秀な巫女です。あなたを冷遇してきた者たちは、きつと世の理に外された者。哀れな人間ですからね』

『いいえ、私は親の顔もわからぬ時分に山に捨てられ、お婆様に引き取られるまでは卑しい生活を余儀なくしてきましたもの。己の体が穢れているのは良く理解しておりますから、どんなに冷ややかな視線を送られようと我慢してこられました。ですが……』

『……』

驟雨は黙って八重の言葉を待つ。

『……、ですが。今回驟雨様の住まう九州に来て、そして片瀬様や驟雨様に出会い、本当に嬉しかった。沖田総司の魂を宿していた時も、人の温もりと云うものを感じられた。そして私を庇い、助けて頂いた驟雨様に、私は、私はこの先我慢して行くのを、恐れてしまつかもしれません』

『だったら』

『え？』

驟雨は杯を濡れ縁に置いた。

『だったら、ここで供に暮らせば良い。八重は初めから我慢などせぬ生き方を選べばよかった……。お前は優秀な梓巫女だと私は常々理解していた』

『勿体無いお言葉です、驟雨様。 私などを』

『など。 と云う言葉を使うのはこの三舟驟雨に対する冒瀆かい？』

『そんな、とんでもございません・・・』

『私は・・・ 何度も云っているだろ、 八重の事を優秀だと思っていると。 真一だってそう思っている。 いや、お前の事を知れば、万人にその気持ちは生まれるだろう。 我慢などしなくて良い。 それに、いつもここで酒を呑むのは真一とだけだったからな、八重が住まうとなると、あいつもきっと大喜びだろう』

『驟雨さま・・・』

八重は袖で流れる涙を何度も、何度も拭いたのだった。

名も無き名刀と魂（後書き）

憑き物落し 第二弾。 如何だったでしょうか？^^；
今回は実在の人物を少し登場させてみましたが、もし皆々様の気分を害してしまう表現などがありましたら、平にご容赦のほどをmm；
って、謝ってばかりの独楽です。

次回はどんな物の怪、または憑き物、魂のお話になるのでしょうか
ね。。。笑

もし良かったら、次回もまた読んで下さいね

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5912j/>

憑き物落し

2010年10月28日04時14分発行